「地域防災セミナー」活動報告２

障がい当事者の視点で考える防災

神戸市 兵庫区自立支援協議会 防災部会長 **泥 可久 氏**

（１）阪神・淡路大震災での被災経験

皆様、こんにちは。兵庫区自立支援協議会の泥と申します。私は当事者として兵庫区で活動しています。３歳の時に障がい者になりました。その頃、もっとも怖いのが鏡でした。高校時代は鏡の前を通るのが怖く、「なぜこのような体になったのだろう」と非常に悩んで苦しんだ時代がありましたが、今はこのように堂々と出てくることができます。人間は変わることができます。

その信念をもって、障がい者も何とかして変わらなければならないと思って始めたのが、防災の活動です。家で閉じこもっている人を地域の中に引っ張り出すという活動を始めたのが１０年前です。

阪神・淡路大震災で障がい者は苦難に遭いました。平常時には、障がい者はさまざまな施設を半額や無料で使えますが、大きな災害時には、それが倍返しになります。倍返しということは、障がい者は相当覚悟しなければなりません。もっと減災活動が必要だと考えたのです。しかし、「もし私が声を上げると、自分がすべて責任を負わなければならなくなる」と１～２年悩みました。

平成１６年に、神戸市の災害復興１０年で、市長が堂々と「神戸市は立派なまちに生まれ変わりました」と世界に発信したことを腹立たしく思いました。何も変わっていないのが、人間の心と、障がい者や高齢者等、要援護者に対する制度的なもの、マニュアル、考え方で、まったくなっていません。これではだめだと思いました。そこで、平成１６年に、兵庫区自立支援協議会の中でひとつの活動部会を作ろうという、声を上げました。

それから私が考えたことは、当事者の意識改革を行い、地域の中に引っ張り出すことです。鏡を怖がっていた人間が、いつの間にか地域の中で、民生委員をしたり、自治会長や老人会長をするようになりました。活動をする中で、障がい者は「孤独になってはいけない」、「困ったときに声を上げられる態勢」、「家の中の危険箇所の点検」、「常に危機管理意識を持つ」の４つを私の目標に掲げました。

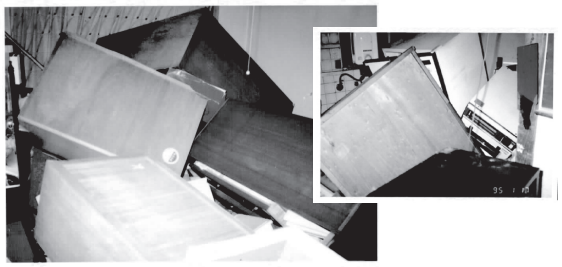
この写真は、阪神・淡路大震災で私が経験したことです。家の中のタンスが倒れました。市営住宅だったのですが、タンスや物が散乱する中から、不思議にも私は出て来ることができました。どの家でも、同じような状況だったと思います。私の家は少しは傾きましたが、潰れなかったことが幸いでした。妻と２人暮らし

当事者の意識改革の必要性

1．地域の人とのつながり
2．孤独は敵、自分の存在をアピール
3．困ったときに声を上げられる態勢
4．家の中の危険箇所の点検
5．危機管理意識を持つ

出所：泥可久氏講演資料

家の中の状態



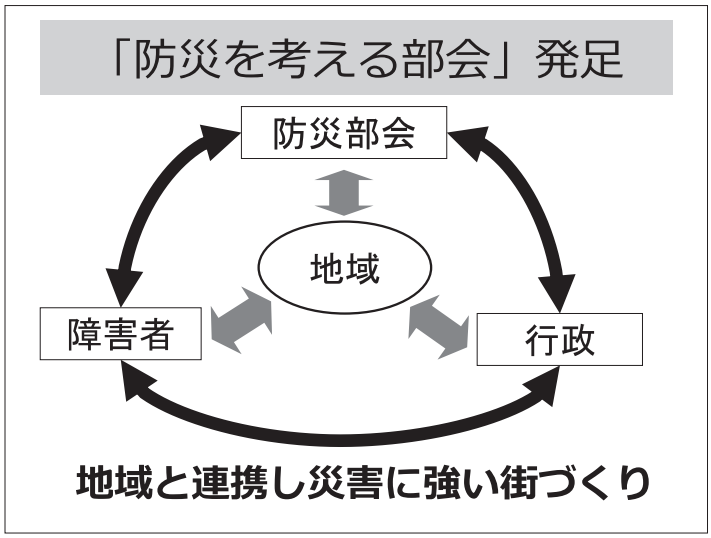
出所：泥可久氏講演資料

でしたが、その中から妻の助けを得て外に出ることができました。その後、妻がどこからか松葉杖を探し出してくれました。

私の住宅には車椅子の人も２人いましたが、それぞれの生き方が非常に気になっていました。非常に活動的な車椅子の人と、組織の中にいても非常に消極的でいつも同行しなければならない車椅子の人でした。活動的な人は、この中からはい出てきて、玄関で助けを待っていたと言います。消極的な人は、いくら声を掛けても返事がなかったので、ベランダのガラスを割って中に入ると、震えて固くなって動けなくなっていたそうです。障がい者の生き方が、このような大災害になったときに大きく差が開くという経験をしました。このようなことから、障がい者を地域の中に引っ張り出し、もっと強い人間になってほしいと考えるようになりました。

（２）兵庫区自立支援協議会　防災部会の設立

まず、防災部会を立ち上げました。私ひとりでは何もできないため、地域と行政、自立支援協議会の３つを動かして何とかしようと思い、組織を作りました。肢体、視覚、聴覚、知的障害親の会、重心親の会等の５つの福祉団体があります。私は、それらの連合団体の長もしていたため、その人たちを集めました。最初は彼らから「思い出したくない」と怒られましたが、「南海トラフ地震が来たら、また阪神・淡路大震災時の苦い経験をしなければならなくなる。なんとか思い出してください」と説得して、思い出してもらいました。すると、震災当時の困ったことがどんどん出てきました。「避難所に着いたときには、スペースがなく廊下に寝て寒い思いをした」、「環境の変化が苦手な知的障がい者は、避難所に行けなかった」、「聴覚、視覚障がい者は、情報不足のために、平常時は自分でできることができなかった」等です。なんとかしなければという機運が盛り上がってきて、第２段階に入ることになりました。



出所：泥可久氏講演資料

（３）「災害時要援護者登録制度」の創設

要援護者登録制度の検討として、私は肢体障害者福祉協会、視覚障がいの人は視覚の団体、聴覚障がいの人は聴覚の団体等と各団体を１軒１軒回り、重度の人の名簿作成を行いました。また、自立支援協議会で独自に、「『要援護者（障がい者）防災支援計画』にかかる『個人情報の使用に係わる同意書』」を作りました。これは、自立支援協議会の障害者地域生活支援センター長の印鑑が押されています。これを作成して、自分たちで同意を取っていきました。神戸市や行政、消防署は名簿をもっていますが、「この段階では教えることはできません。自分たちで集めるのは自由です」という意見でした。神戸市長を説き伏せるためには、このような活動の実態を作ることが必要だと感じたのです。行政はいつも過去の業績がどうだったかを評価します。そこで、当時の神戸市の課長と相談して、何人に同意書を取り付け、内訳としてどのような人がいるか、障がい者が何人いるかなどの詳細な情報を整理しました。

この活動はわれわれが勝手にできるものではなく、地域の人の了解が必要です。われわれの目的は、地域の中に障がい者を呼び出し、地域の人も障がい者に関わってもらうことです。私と課長とで、地域の民生委員、防災福祉コミュニティ、消防団の人に集まっていただき、「障がい者を入れて防災訓練をしたい」と話をしました。行政の協力を得て、地域の人も説き伏せるという行動を起こしました。

「要援護者（障がい者）防災支援計画」にかかる「個人情報の使用に係わる同意書」

兵庫区地域自立支援協議会　委員長　宛
事務局長　宛

私は災害発生時に地域の支援を受けたいので、「要援護者（障がい者）防災支援計画」に同意し、この目的の範囲内で個人情報が使用される事に同意し、下記の個人情報を提供します。また下記の個人情報を、災害発生時や区が行う防災訓練時に、民生委員、防災福祉コミュニティ、兵庫区地域自立支援協議会構成機関、行政機関の間で共有することに同意します。

記

1. 氏　名　＿＿＿＿＿＿＿＿（ふりがなをお願いします）
2. 性　別　（　男　・　女　）（○印をつけてください）
3. 年　齢　＿＿＿＿＿＿歳
4. 障害区分　肢 体・視 覚・聴 覚・知 的・重 心（○印を付けてください）
5. 所属団体　＿＿＿＿＿＿＿＿（所属団体がある方のみ記入）
6. 住　所
7. 連絡方法
　①電話番号　②携帯番号　③ファックス番号　④E. メールアドレス
8. ご本人に代わって連絡可能な方の氏名と電話番号
　（氏名：＿＿＿＿＿＿）（電話番号：＿＿＿＿＿＿）

年　月　日

氏　名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印
（代筆者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

誓　約　書

上記ご記入いただきました個人情報は、この目的外には利用しない事を誓約します。

年　月　日

兵庫区地域自立支援協議会事務局（ひょうご障害者地域生活支援センター　センター長）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　印

出所：泥可久氏講演資料

（4）災害時要援護者が参加する防災訓練の実施

課長から「これだけのことができれば、政策懇談会で市長に提言する」と言っていただいたため、活動に関する資料をパワーポイントで作成して、政策懇談会に提言していただきました。早速兵庫区をモデル地域として、神戸市で初めての要援護者の防災訓練をしよう」と言ってくださり、私の住んでいる明親小学校区で実施することになりました。

取り組むとなると地道に事故のないようにすることが必要です。当時、明親小学校区には132人の重度障がい者がいましたが、そのうち登録した人は15人でした。その15人もかなり説き伏せて、登録いただきました。初めてのことなので、障がい者もよく分からないのです。15人を外に安全に出すために、1軒1軒についてどのような道を通っていけばよいかを実際に行って点検していきました。あらゆるところで、車が置いてあったり、電柱が側道の真ん中にあって車椅子が通れない等の問題点がありました。このようなことをひとつひとつ事前検証しました。

- 避難所までの避難経路を確認
- 車椅子乗車、目隠しをしての手引き誘導

出所：泥可久氏講演資料

リフト車も出してもらい、タクシー会社とも協定しました。徒歩で来る人、タクシーで来る人、電動車椅子で来る人等、さまざ

まな形で明親小学校に集まりました。神戸市の訓練なので、日曜ですが、明親小学校の生徒にも全員出席してもらい、生徒と障がい者が一緒になって避難訓練を行いました。かなり大々的な避難訓練になり、私自身も、すごいことができたと嬉しい思いでした。

ただし、参加した障がい者からは、「寒いときに、なぜこのようなことをするのか」と怒られました。阪神・淡路大震災は1月17日でしたが、確かにこの日も1月21日(土)で寒い日でした。寒い中、要援護者席を設けて、1時間ほど市長や消防署の話を聞いたり、小学生の歌を聞いたり、消防がホースをかけるのを見学するだけだったので、非常に寒い思いをしました。訓練終了後、「寒い中で頑張って下さった15人の人が、神戸市や国を動かす力になる」という話をして、一人ひとりの手当てを行っていきました。

これを契機として、兵庫区では、自主的に毎年ひとつの校区を定めて実施しています。平成22年くらいまでは、自分たちで集めた情報である100人余りで精一杯でした。各団体からも「これ以上は回ることができない」と言われたため、平成22年くらいから行政から名簿を出して同意書を送っていただく方法に変えました。その後は、同意書が100、200、400と増え、現在は1,000以上になっています。

兵庫区総合防災訓練

平成18年1月21日　明親小学校地区防災訓練

出所：泥可久氏講演資料

訓練への障がい者の参加

日時	対象地区	参加者数（付き添い含む）
H18/1/21	明親地区	30名
H19/10/19	夢野地区	31名
H20/10/19	兵庫大開地区	24名
H21/11/15	荒田地区、福原・西橘地区	18名
H22/5/30	平野地区	26名
H23/6/12	川池地区	46名
H24/10/28	明親・入江・和田岬・浜山地区	32名
H25/6/5	水木・中道地区	13名
H26/3/9	東山地区	30名

出所：泥可久氏講演資料

この資料では障がい者のみの人数を出していますが、活動自体はひとり暮らしの高齢者等も含めて実施しています。課長から、障がい者だけでなく、高齢者や乳幼児も含めて要援護者としてやっていこうというアドバイスを受けました。

（5）避難生活を考えるワークショップ

避難訓練の次に、避難した後に何をすべきかという問題があります。神戸市に人と防災未来センターがあり、そこの研究員から、「避難生活を考えるワークショップをしましょう」という提案があり、3ヵ所でワークショップを行いました。そのうちの1ヵ所のワークショップの写真です。障がい者5団体が中心となって、地域福祉センターに地域の人に集まっていただき、「もし何かあった場合、障がい者はどうしてもらいたいか。地域の人はどのようなことができるか」というテーマについて話し合い、意見を紙に書いて出してもらい、それらを分類し発表しあいました。

校区にひとつずつ地域福祉センターがあり、災害時には、そこを福祉避難所にする協定を結んでいます。しかし、地域福祉センターは新しく建てられたところは、車椅子用のトイレもある等便利になっていますが、古いところは、まず入るときに階段があったり、トイレは車椅子で入るとバックできなかったり、あちこちに段差があったりします。このような改善項目をひとつひとつ出しました。何かあった場合に、第1避難所に入れない人のために福祉避難所を開設しても、車椅子の人が行けなかったり、視覚障がいの人がつまずくため行けなかったりすることもあるため、15ある地域福祉センターを、実際にひとつひとつ見てチェックしました。1階が会議室で2階が避難所になっているところで、エレベーターがない建物では、車椅子ごと、階段をもち上げて上がることを行って、地域の人と大変さを確認しました。視覚障がい者の人がトイレに

避難生活を考えるワークショップ

	参加者
障がい者	肢体障害者福祉協会 視力障害者福祉協会 聴力言語障害者福祉協会
障がい者の家族	重度心身障害児（者）父母の会兵庫支部 神戸市手をつなく育成会兵庫支部
福祉事業者・支援者	いかり共同作業所・シエスタ兵庫 多機能型障がい者デイセンターひょうご 手話通訳グループ「葦の会」
地域団体等	熊野地区（H22年度） 夢野地区（H23年度） 兵庫区民生・児童委員協議会
社会福祉協議会	兵庫区社会福祉協議会
自立支援協議会	ひょうご障害者地域生活支援センター
行政	兵庫区・保健福祉局
研究機関・運営	人と防災未来センター （有）まち処計画室・㈱まちづくり商会

出所：泥可久氏講演資料

行く際には、ちょっとした段差でもつまずいてしまうことも確認しました。

（6）災害時要援護者（障がい者）の登録状況

要援護者登録数の推移です。当初の平成18年度は15～30人、平成19年度50人、平成20年度約100人と増えました。われわれの精一杯の力で平成22年度に150～160人の同意書を取りました。平成22年度から、市からの対象者への同意方式に変えました。条例ができる前です。その後、平成25年に条例ができて、どんどん登録数が増えていきました。それにともない、私は同意書を出した人が避難訓練に参加するかどうかを確認することが必要でした。防災訓練をするにあたって、「安否確認のみでよいか」、「避難訓練に参加するか」を、自立支援協議会やあんしんすこやかセンターの人と1軒1軒訪問して確認しました。正直なところ、このような活動はかなり辛かったですが、何とかやり遂げました。

障害者と地域住民による避難所のチェック

肢体障がい班

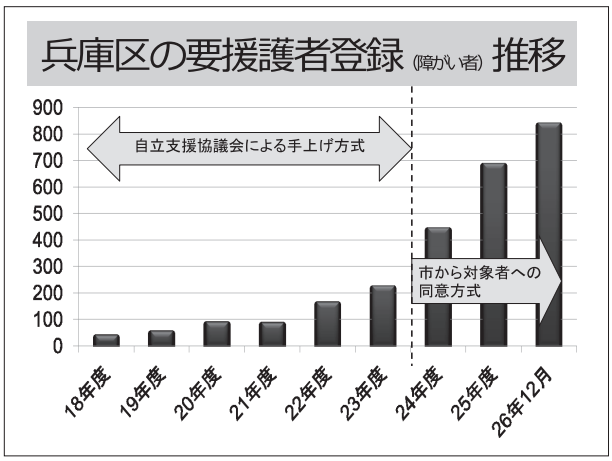
視覚障がい班

出所：泥可久氏講演資料

活動を通して見えてきたことは、地域の人は障がい者に対して、「このようなことを言ってよいか」等の戸惑いをもっていることです。私なら「これはどうすればよいのか」と言えば済むと思うことでも、「これはどのようにされていますか」と丁寧な言葉を使わなければ、障がい者を傷つけてしまうと思っています。日本人は優しいですが、そのようなことがある限りは、地域とはマッチングできません。もっと地域の人が障がい者と気軽に話し合えるようになる活動を展開しなければならないと思っています。そのようなことから、何人かの地域に住んでいる人、活動している人とともに、車椅子の体験、白杖の体験、聴覚障がいの人の体験等、さまざまな活動体験をしました。「このようなときには、筆記がよいのか、口を大きく開け伝えるのがよいか、どうすればよいか」等、地域の人と体験学習を行いました。今後の課題としても、地域との関わりの

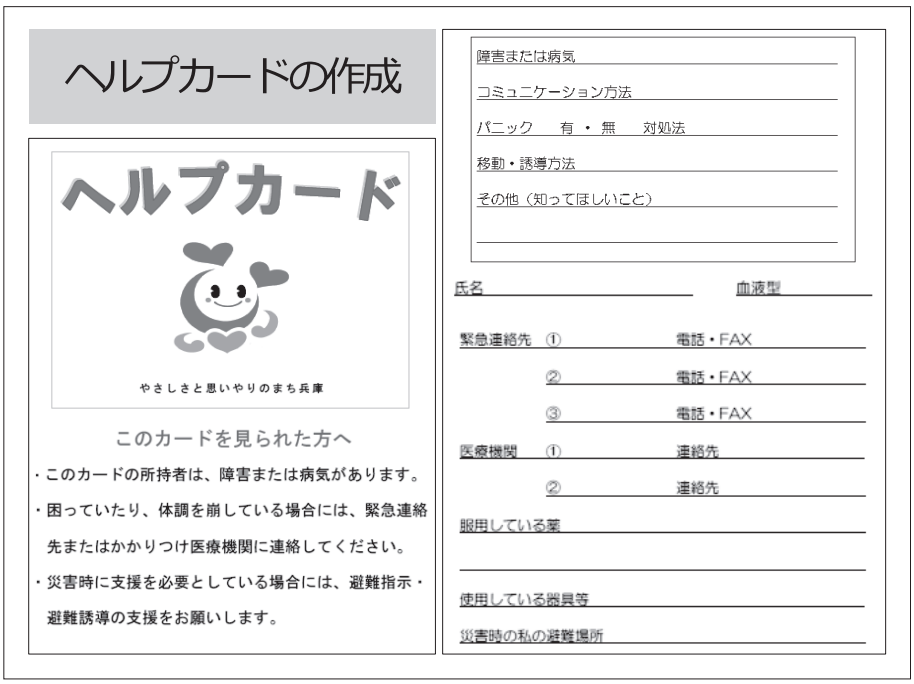
中で体験学習を行っていきたいと考えています。

最近、「ヘルプカード」というものを作りました。障害者手帳のサイズなので、障害者手帳に入れておけば、何かあった場合にも、支援者に障害や病名等が分かります。地域では、名簿をもらってもどうすればよいか分からず、名簿を鍵のかかるところにしまったままにしているケースがあると聞きます。そのようなことからも、名簿に登録している人に「ヘルプカード」を渡していただく活動を始めつつあります。これによって、地域の人と障がい者が密に関わっていけるようになるのではと思っています。



出所：泥可久氏講演資料

障がい者と言っても千差万別です。障がい者でも健常者以上にできる人もあれば、赤ちゃん程度のことしかできない人まで非常にさまざまです。そのような方々を地域の人がどのようにサポートしていくかが課題です。地域の人は障がい者の特徴をまったく知らないため、これからの10年の活動は、名簿を活用して、地域で障がい者の立ち居振る舞いや特色を学ぶワークショップを年２回くらい行い、地域全体が育つような、理想的な形に進めていきたいと思っています。



出所：泥可久氏講演資料

これは、「神様たちの街」という記録映画です。兵庫区は人情豊かなまちです。われわれはグラウンド・ゴルフを婦人会や老人会で開催する等でふれあいがあるのですが、これもひとつのふれあいの形として、毎年ファッションショーを開催しています。おもしろいファッションの人が出てきます。障がい者の仲間の中からも12～13人出てきます。私も右から２人目に出ています。２月27日～３月11日まで元町映画館で上映されます。映画監督は、「本当に神様がいるような街だな」と言っていました。兵庫区が神戸市の理想的なまちになるよう、私も力を出していきたいと考えています。ご清聴ありがとうございました。